

平成 22 年 5 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～ 2009  
 課題番号：19520290  
 研究課題名（和文） 媒介者としての独歩文学—ヨーロッパから日本、そして韓国へ  
 研究課題名（英文） Kunikida Doppo's Literature as Mediator  
 ; From Europe to Japan and Korea  
 研究代表者：丁 貴連（JEONG GWIRYUN）  
 宇都宮大学・国際学部・教授  
 研究者番号：803128591

研究成果の概要（和文）：西洋文学の一方的な受信者と知られる日本の近代文学が、韓国の近代文学に大きな影響を及ぼしていたという日本近代文学の「媒介者」としての顔を、国木田独歩の「春の鳥」（1903）を手掛かりとして明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this paper, I would like to clarify the fact that Japanese modern literature was not only the receiver of Western literature but also it had a great influence on Korean modern literature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：各国文学・文学論

科研費の分科・細目：比較文学

キーワード：媒介者・一人称小説・国木田独歩・ワーズワース・ツルゲーネフ・田榮澤

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 東アジアの近代と日本

かつての東アジアは中国を中心とする中華文化圏を形成し、韓国や中国はその影響下に置かれていた。

しかし、19世紀半ば頃になると、世界史的な規模で西洋の「近代」が東洋に迫り、東アジアをめぐる国際環境は一変する。それまで長い間中華文明に憧れていた日本が、そのまなざしを西洋に向けてることによって東アジアでは唯一近代化に成功し、韓国や中国に対して強い影響力を行使するようになったからだ。韓国や中国は、そのような日本に強い危機意識を抱きつつ、わずか十数年で制度や工業技術から教育、文化まで近代国家へと生

まれ変わった日本に羨望のまなざしを向け始めた。そして、彼らは制度や工業技術といった社会の根幹をなすものから文学など人の心にかかわるものに至るまで近代化に必要なあらゆるものを、直接西洋からではなく、一度日本に受容されたものを受け入れた。つまり、韓国や中国など東アジア地域は日本を通じて近代化（西洋化）への道を歩み始めたのである。

そこで、私は東アジアの近代化、とりわけ韓国の近代化に日本が及ぼした影響関係を、文学の受容と伝播という視点からとらえ直し、これまで歴史や政治、経済の分野でしか議論されてこなかった東アジアの近代化における日本の役割に、文学においても日本が

深くかかわっていたという事実を提示したいと思うようになった。

### (2) 韓国近代文学の「起源」としての日本近代文学

韓国の近代文学史を一瞥すると、開化期に書かれた小説のほとんどが広末轍腸や尾崎紅葉、徳富蘆花、渡辺霞亭らの翻案であるばかりでなく、韓国近代文学の基礎を作った李光洙や金東仁、廉想渉、朱耀翰などがいずれも日本からの留学帰りであるという文学史的事実が浮かび上がってくる。これは、もっぱら西洋を見つめ、西洋近代文学の一方的な受信者と知られる日本の近代文学が、実は韓国近代文学の「起源」に深くかかわっていたということの意味する。

ただ残念ながら、日本や西洋、さらには韓国における近代文学研究者のほとんどは、日本の近代文学が西洋文学の圧倒的な影響の下で成立したという事実については関心を示しても、その日本の近代文学が韓国の近代文学に計り知れない影響を及ぼしたという事実についてはあまり関心を示していないのだ。

このような現状を、私はかねてより物足りなく思い、日本は西洋近代文学の影響を受けて独自の近代文学を作り上げたばかりでなく、韓国や中国、台湾の近代文学にまで影響を及ぼしていたと主張してきたが、その過程のなかで国木田独歩という文学者の存在が浮かび上がった。

### (3) 「媒介者」としての国木田独歩

独歩は、ワーズワースやツルゲーネフ、モーパッサンなどの影響を強く受けて日本近代文学史上初めて主知的な短編スタイルを完成させた作家として知られる。そして、そのことがまた韓国の作家たちを独歩文学に接近させた大きな原因となった。

注目すべきは、独歩の影響を強く受けた韓国の作家たちが、いわゆる韓国近代文学の基礎を作った、あるいは近代文学を完成したと評される人たち、例えば韓国近代文学の祖と言われる李光洙、短編小説の開拓者と知られる金東仁、リアリズム文学の完成者と目される廉想渉であるということだ。私は、修士論文以来この事実注目し、独歩が韓国近代文学に及ぼした影響関係の究明に取り組んだ。

その成果は、博士論文「国木田独歩と若き韓国近代文学者の群像」（1996年度筑波大学大学院文芸言語研究科）と、日本比較文学会や朝鮮学会、国際日本文学研究集会、韓国日語日文学会、東アジア日本学会などに掲載された学術論文として結実した。

これによって、韓国近代文学の成立に日本の近代文学、とりわけ独歩が及ぼした影響関係が解明されたが、問題は研究を

深めていくにつれて新たな課題が浮かび上がってきたことだ。それはほかでもなく、韓国の近代文学に受容された独歩の作品のほとんどがワーズワースやツルゲーネフ、モーパッサンなど、いわゆるヨーロッパ文学の影響を強く受けていたことである。つまり、韓国近代文学に及ぼした独歩の影響を明らかにするためには、これまでのヨーロッパ文学から日本文学、あるいは日本文学から韓国文学という二国間の視点だけではとらえきれない問題が生じてきたことだ。

本研究の構想はこの問いから出発した。そして、その問いに対する答えのヒントを、私は文化の受容と伝播における「媒介者」という役割から得ることができた。

### 2. 研究の目的

独歩は、ワーズワースやツルゲーネフ、モーパッサンなど西洋文学をモデルに日本近代文学史上初めて主知的な短編スタイルを完成させた作家として知られるが、その独歩の作品をモデルに近代韓国文学の基礎が作られたことについてはほとんど知られていない。

本研究では、韓国近代文学の「起源」と深くかかわる独歩の「春の鳥」を手掛かりとして、独歩文学が韓国文壇に受容された背景とその特徴、韓国文学にもたらした意味について検証した。と同時に、その過程で浮かび上がってくる「媒介者」としての独歩像を明らかにした。

### 3. 研究の方法

本研究では、次の3つの方法を用いて、ワーズワースとツルゲーネフからヒントを得て執筆された「春の鳥」が韓国の田榮澤の「白痴化天才か」に受容されていく過程を明らかにした。

(1) 「春の鳥」に影響を及ぼしたワーズワースやツルゲーネフ及び、影響を受けた田榮澤の作品や先行研究、関連文献を米国と日本、韓国で調査・収集し、研究者たちとも意見交換を行った。

(2) 収集した文献や先行研究を以下の2つのテーマに分けて分析を行った。

①独歩の「春の鳥」に及ぼした西洋文学の影響をモチーフと叙述形式の二つの側面から分析し、モチーフにはワーズワースの“*There was a boy*”と“The *Idiot Boy*”から、叙述形式には二葉亭四迷の訳したツルゲーネフの「あひぶき」などの諸作品からの影響を指摘した。

②「春の鳥」の影響を受けて執筆された田榮澤の「白痴か天才か」を分析し、モチー

フと叙述形式両方において「春の鳥」の影響を受けていることを指摘した。

(3) 分析したものを学会で発表し、専門家や関連分野の方からの評価を請うた。その際に指摘された意見や疑問点、問題点などを調べ直し、査読付きの学会誌に投稿した。

#### 4. 研究成果

これらの分析によって、以下の点を明らかにすることができた。

##### (1) ヨーロッパ文学から日本文学へ

###### ① ツルゲーネフから独歩へ

独歩は、「第一人称の開祖」と評されるほど一人称小説が多い。特に、〈自分〉という一人称の語り手を通じて自分の体験を語る作品が非常に多いが、これは Brookes & Warren *Understanding Fiction* (1959) によれば、近代になってようやく現われた新しい形式である。その新しい形式を独歩は、耽読していた二葉亭四迷訳のツルゲーネフの作品「あひどき」1888、「めぐりあひ」1888（後『奇遇』）「片恋」1888、「夢かたり」1896、などから学んでいた。

この形式は、いわば「近代小説として要請される客観性というものと、作者の主観というものと」の両者を、同時に表出できるようになる最も手取り早い、そして書きやすい方法（滝藤満義）として、独歩以外の文学者にも多くと入れられた。だが、独歩ほどこの形式と体質が合う文学者がいないほど、独歩はこの形式を好み、多用しただけではなく、1890年代（明治30年代）の日本文壇に流行らせると同時に、1910年代の韓国文壇にもブームを巻き起こした。

###### ② ワーズワースから独歩「春の鳥」へ

「春の鳥」がワーズワースの“*There was a Boy*”と“*The Idiot Boy*”の二つの詩から影響を受けていることは周知の事実である。独歩は、この二つの詩から鳥が大好きな白痴の少年が夭折して自然の懷に帰っていくモチーフのヒントを得て「春の鳥」を執筆した。しかし「春の鳥」には、ワーズワースの影響だけでは収まりきれないものがある。それは、主人公の白痴少年の造形に独歩自身の白痴教育への関心が深くかかわっていることだ。とすると、「春の鳥」はワーズワースの影響に独歩自身の白痴体験が重なって生まれた作品だということが知られるが、本研究で注目したのは、六蔵という白痴の少年像である。この少年は、日本近代文学における最初の愚者の子供であるばかりでなく、伝統的子供観とは異なる子供時代を顕在化させた人物である。この新しい子供観を、独歩は耽読していたワーズワースから得ていた。

とりわけ、ワーズワースの詩に見られる子

供こそ自然と交流し、自然と同化する存在だという考えに深く共感した独歩は、それまでの子供観とはまったく異なる新しい子供像を見出したのである。「春の鳥」をはじめ「画の悲しみ」「馬上の友」「鹿狩」「指輪の秘密」「山の力」「泣き笑ひ」「日の出」「少年の悲哀」など一連の少年ものに描かれた少年たちは、いずれも従来の価値観や美意識、道徳観にとらわれない子供である。この少年物を留学中に耽読していたのがほかでもない、田榮澤なのであった。

##### (2) 日本文学から韓国文学へ

「春の鳥」と「白痴か天才か」は〈私〉という語り手が、ある田舎の小学校の赴任した際に知り合った一人の白痴少年との交流を物語るという叙述様式と、白痴少年の造形と子供の発見というモチーフ、そして作品全体の構想という点において明らかに影響関係にある。本研究では、とりわけ以下の2点に注目し、両者の影響関係を明らかにした。

###### ① 一人称小説ブームと他者の発見

田榮澤の「白痴か天才か」は、白痴の子を登場させて無垢のイメージにつながる子供観を提示するという当時としては非常に斬新な題材と、〈私〉という一人称の語り手が自分の体験や見聞を語るというそれまでの韓国文学にはなかったまったく新しい形式によって従来の韓国文学とは一線を画した作品となった。それゆえ、この作品は発表されるや否や文壇の注目を浴びたが、とりわけ一人称の語り手を通じて自分や他者の体験を語るという形式に対する反響は大きく、早くも1925年頃には書簡体形式とともに韓国文壇を代表する叙述形式の一つとなった。

注目すべきは、「白痴か天才か」が一般読者もさることながら、同じ作家仲間にも影響を及ぼしていたことだ。

1910年当時、韓国では小説家を目指す若者たちが時代の変化に気付かず、相も変わらず社会教化を目的とした啓蒙小説しか書かない既存の文壇に対して強い危機感を抱いていた。しかし、だからと言って、自らの力では新しい文学を打ち立てることもできずいら立っていた。そこに登場してきたのが田榮澤の「白痴か天才か」である。

従来の韓国文学では一度も用いられることのなかった新しい叙述様式を使用して韓国社会が長い間顧みなかった子供や女性、貧民、愚者とといった社会の底辺を生きる人々の生を浮き彫りにしただけではなく、植民地下の韓国の現実をも描き上げたその作品世界に、若き文学者たちは大いに刺激された。と同時に、早速その手法を自分たちの作品に取り入れはじめた。その結果、1920年代の韓国文壇に空前の一人称小説ブームが巻き起こ

った。その背後に「春の鳥」をはじめとする独歩の一連の一人称小説があることはいくらか強調してもし過ぎることはないと思われる。

#### ②モチーフとしての子供の発見

「白痴か天才か」は、ある山村の小学校に赴任してきた教師である<私>が、七星という一人の白痴の少年に出会い、白痴であるが故に村人に疎外されて死んでしまった少年の身の上話を語った作品である。つまり、この作品は<私>が見た白痴の子供の物語であるが、実は、この子供こそが韓国近代文学が発見した最初の子供なのである。

かつて韓国では、目上の人や年長の者への絶対的な服従と礼儀が徳目とされ、子供の存在を強調することはタブーであった。こうした考えは近代になっても衰えることなく、子供は卑下と否定の対象として見做されていた。

しかし、1910年代に入ってから始まった儒教制度への批判と家族制度の見直し、さらには「孝」の概念が崩れるのを契機に徐々にではあるが、子供は保護されるべき存在として認識されるようになった。つまり、子供を取り巻く抑圧的な現実に対して大人たちが問題意識を持つようになったのである。

その結果、1900年代後半から10年代にかけて、かつて例のないほど子供たちに熱いまなざしが注がれるようになった。しかし、子供を取り巻く現実依然として厳しく、文壇も全く取り上げることがなかった。

そうした文壇に対して違和感を抱いていた田榮澤は、韓国文学史上初めて現実の子供の姿を現在化した「白痴か天才か」を執筆し、文壇の注目を浴びたが、田榮澤がほかの誰よりも早く子供の存在を書き上げることができたのはほかでもない、他者の人生を観察し、それを語るという小説技法を取得していたからである。

#### (3) ヨーロッパから日本、そして韓国へ

田榮澤は、韓国近代文学史上初めて愚者の子供を描き上げた作家である。しかし、まったく新しい子供時代を描くことは決して容易なことではなく、留学中に耽読していた独歩の「春の鳥」をモデルに主人公の少年を造形した。その独歩の「春の鳥」の主人公の少年だが、実は、本文中に独歩自身が「英国の有名な詩人の詩に『童なりけり』といふがあります」と、ワーズワースの詩に言及されていることから想像がつくように、ワーズワースの影響の下に生まれた人物である。

一方、田榮澤が「白痴か天才か」ではじめて試みた一人称叙述形式は、韓国文学が近代文学という表舞台へ進出するにあたって決定的な役割を果たした形式として文壇の注

目を浴びたが、実はこれも田榮澤によって新たに生み出されたものではなく、独歩の「春の鳥」から影響を受けたものである。そして、その「春の鳥」に用いられていた一人称叙述形式も、実は独歩がオリジナルに作り出したものではなく、二葉亭四迷訳ツルゲーネフ作品からの影響である。

このことからわかるように、韓国文学は直接西洋からではなく、一度日本に受容されたものを日本という媒介者を通して受け入れていた。つまり、韓国は日本近代文学を媒介にして文学の近代化を図っていたのであるが、その中心的な文学者がほかならぬ国木田独歩なのである。

#### (4) 媒介者としての独歩文学

独歩という作家は、ワーズワースやツルゲーネフ、モーパッサンなどのヨーロッパ文学から影響を受けて従来の日本文学には描かれなかった新しいモチーフと新たな短編スタイルを開拓したばかりでなく、韓国の近代文学にも影響を及ぼした人物である。

しかし残念ながら、日本や西洋、韓国の文学者のほとんどは、日本の近代文学がヨーロッパ文学の圧倒的な影響の下で成立したことについては強い関心を示しながらも、その日本の近代文学が韓国や中国、台湾といった東アジア地域の近代文学に大きな影響を及ぼしていたという事実に関してはほとんど関心を示さない。

その結果、日本は西洋文学の一方的な受信者だというレッテルをはられるようになった。しかし、日本が西洋文学の一方的な受信者ではないことは、これまで見てきたとおりである。

問題は、このような現象がなにも文学に限ったことではないことだ。哲学や思想から政治、経済、教育などあらゆる分野において日本はあくまでも西洋文化の一方的な受信者にすぎない。

本研究では、国木田独歩の「春の鳥」を手がかりとして、韓国の近代文学に日本が深くかかわっていたという事実を明らかにすることによって、西洋文学の受容に関して日本は決して一方的な受信者ではないという事実を浮き彫りにすることができた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

①丁貴連、「一人称小説が描き出す媒介者としての日本文学—国木田独歩の一人称小説を手掛かりとして」、国際日本文学研究集會會議録、国文学研究資料館、査読有、第33

巻、2010年3月、31-70頁

②丁貴連、「一人称観察者叙述形式が映し出す『新しい人間』—国木田独歩『春の鳥』を手掛かりとして」、『日本文化研究』東アジア日本学会、査読有、第28巻、2008年10月、403-431頁

〔学会発表〕(計2件)

①丁貴連、「一人称小説が描き出す媒介者としての日本文学—国木田独歩の一人称小説を手掛かりとして」、第33回国際日本文学研究集会、国文学研究資料館、査読有、2009年11月27日

②丁貴連、「媒介者としての日本文学—国木田独歩を手掛かりとして」、東アジア日本学会・東北アジア文化学会 2009年度秋季国際学術大会、査読有、2009年10月17日

〔その他〕

①講演：「媒介者としての日本文学・日本文化—ヨーロッパから日本、そして韓国へ」、2009年度宇都宮大学大学院公開講座、2009年10月25日。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

丁貴連 (JEONG GWIRYUN)

宇都宮大学・国際学部・教授

研究者番号：803128591